
体育における 「真正の評価」の展開

—Hopple C.J., Metzler M.W.,
Rink J.D.の主張を中心に—

広島大学
木原 成一郎
広島県安浦町立安登小学校
川端 宣彦

はじめに

アメリカでは1991年にThe National Association for Sport and Physical Education (全国スポーツ・体育協会、以下NASPEと略す)とThe Middle and Secondary School Physical Education Council (全国中等体育会議)により「中等学校体育における重大な岐路」と称される会議が開催された。その会議の報告書を検討した井谷恵子によれば¹⁾、会議では体育履修者数の減少等に見られる1980年代の体育科の衰退傾向が指摘され、その原因として次の二点が指摘されたという。第1は、1983年に連邦政府報告書「危機に立つ国家」が発刊されて以降、アメリカでは卓越性を重視した教育改革が全国的にすすめられ、リテラシーと呼ばれる識字能力や理数科目の学力向上が優先され、職業指導や体育などの非アカデミックな教科の履修者が減少したことである。第2に、公費によって維持された公立学校は、納税者に対してその財源投与に見合う成果を上げていることを説明する説明

責任 (accountability) を求められる。ところが体育は、その成果に次の3つの疑問があるとされた。一つは、生徒が楽しく運動に熱中していればそれでよいとして生徒の興味を重視してきたスポーツ中心の体育は課外活動や学校外のスポーツクラブに勝る意味を持たないという疑問である。二つは、アメリカの国家課題となっている国民の体力の維持向上や健康なライフスタイルの育成に対して体育の貢献度が低いという疑問である。三つは、問題解決や意思決定、学び方の学習という能力の向上や責任感や自尊心、自己管理能力の育成という人間形成に体育が貢献できるのかという疑問である。

連邦政府は教育改革の重要課題である教育内容の水準の共通化を推進するため、民間の教育団体に各教科別の基準書の開発を委ねた。友添秀則によれば²⁾、体育の分野では1995年にNASPEから体育のナショナル・スタンダード、つまり体育基準書が出版された。この体育基準書は、次の二つを目的として刊行された。つまり、第1に、体育のプログラムを学んだ成果として生徒が何を知り、何ができるようになるべきかを明らかにすること。第2に、体育で学ぶべき内容基準を明確に示し、それが学習者にどれだけ定着したかを多様な方法でアセスメントすることである。ここでは、生徒の学習の成果 (outcomes) を明示しそれを評価すること (assessment) が、カリキュラムの構成の中心課題となっている。

生徒たちの人間形成に体育が貢献していることを提示する必要性を背景に、この体育の基準書はプログラムの期待すべき成果とその成果を評価する方法を記述したと考えられる。ただし、プログラムの期待すべき成果を評価するために

は、従来のスキルテストや体力テストに変わる評価の方法が必要となった。この評価に関する変化は、「オーセンティック・アセスメント（真正の評価）」（authentic assessment）という概念に端的に示されていると思われる。

西岡加名恵は、「真正の評価」の具体的なものとして、「作品づくりや実技試験に代表されるようなパフォーマンス課題による評価から、生活の自然な流れの中でインフォーマルに評価を行なうものまで様々ある。³⁾」と指摘している。さらに西岡は、パフォーマンス課題を「子どもが実際に特定の活動を行い、それを評価者が観察し、学力が実現されているかどうかを評価するもの⁴⁾」と定義し、これまで芸術や体育などでこのパフォーマンス課題による評価が行われてきたと述べている。たしかに体育では、子どもの実技というパフォーマンスを観察して評価する方法が従来も用いられてきた。それでは、「オーセンティック・アセスメント」という概念に着目することで従来のパフォーマンス課題にどのような変化が生じたのだろうか。

本研究の目的は、「オーセンティック・アセスメント（真正の評価）」の影響による体育の評価の変化をホップル（Hopple C.J.）、メツラー（Metzler M.W.）、リンク（Rink J.D.）等の主張を検討することによって明らかにすることにある⁵⁾。この目的を明らかにするために、まず、体育科教育学における「真正の評価」の解釈をホップル、メツラー、リンクの主張を取り上げて検討し、その共通点と相違点を指摘する。次に、彼らが示した「真正の評価」の具体例を検討する。ここではリンクが作成委員会の委員長を務めたNASPEの体育のナショナル・スタンダー

ドで提案された健康関連体力に関する評価法とメツラーの紹介したボール運動の評価法を検討する。最後にまとめとして「真正の評価」の今後改善すべき方向を指摘する。

1. 体育における「オーセンティック・アセスメント（真正の評価）」

まず、ホップルとメツラー及びリンクの間でオーセンティック・アセスメントの解釈で共通している点を指摘する。

ホップルはオーセンティック・アセスメントと従来の実技評価を比較して以下のように言う。

「パフォーマンス評価の概念は体育教師にとって全く新しいものではないが、オーセンティック・アセスメントの概念は革新的なものである。この概念に基づけば、評価は設計された文脈でよりもよりリアルな生活の状況（in a more real-life situation）で望ましい行動を遂行し示すときに、オーセンティックであるとみなされる。それは生徒が学んだことを今や将来の日常生活の状況に適用することを要求する。⁶⁾」

つまり、体育では従来から実技評価を行なっているが、どのような実技の評価を行なえば、「よりリアルな生活の状況（in a more real-life situation）で望ましい行動を遂行し示す」ことを評価する事ができるかを問題にしたという意味で、「オーセンティック・アセスメントの概念は革新的」であったというのである。

また、メツラーも、オーセンティック・アセスメントを「学校において学ばれた生徒の知識が適用されるであろうリアルな生活状況（the real-life settings）に参加したり真似たりするやり方で評価する実践にあてはまること⁷⁾」と

解釈している。さらにリンクは、「オーセンティック・アセスメントは、実際の生活の状況（real-life settings）で学ばれることの使用に焦点化される。」⁸⁾と述べている。その解釈はホップルやメツラーと同一と考えられる。

次に、3名の相違点を指摘する。3名ともオーセンティック・アセスメントを「よりリアルな生活の状況」に参加したり、その状況を真似たやり方で評価することと解釈しているが、その「生活」の捉え方に相違が見られる。

例えば、ホップルは4分の4拍子の音楽に合わせて動く生徒の能力を評価するという場合、すべての生徒に特定のフォークダンスを踊らせるよりも、4分の4拍子で動く音楽と踊りを生徒に選ばせた方が、「より真正の文脈」で評価したことになる⁹⁾と述べている。ホップルは「よりリアルな生活の状況」を、生徒達が学校の内外で自由な余暇時間に運動する生活の状況という意味に解釈しているように思われる。その結果、「生徒達により意味があり興味のわく文脈で望ましいスキルを生徒達に示させなさい。」¹⁰⁾とされるように、生徒にとって興味のわく状況が最もリアルな生活の状況と解釈されるのである。

これに対し、メツラーは体育でのオーセンティック・アセスメントの実例として以下の2つをあげる。

①「健康に関係した体力テストは、…より正確に健康生活のパターンを決定する学校生活、放課後、家庭といった別の場面で作られた健康に関係した行動や選択を評価しない。もし体育のプログラムの述べられた目標が活動的で、健康的なライフスタイルを促進することだとしたら、その学習の真正の評価は、生徒が健康に関

係した選択をしたり健康に関連した行動をする時間や場所でなされるだろう。生徒の食べた食品とか、彼らが従事した穏やかだったり力強かったりする活動が書かれた日誌は、適切な真正の評価となるだろう。」¹¹⁾

②「もし目標が、生徒がソフトボールの試合をすることをどのように学ぶのかということならば、真正の評価はゲームとは関係のないところでスタンダード化されたスキルテストを用いるのではなく実際の試合の間に行われるだろう。このような場合、真正の評価は生徒のプレイしたゲーム内でのゲーム記録やパフォーマンスチェックリストに基づかれるだろう。」¹²⁾

このメツラーがあげた二つの例によれば、彼のいう「真正の評価」の判断基準となる「よりリアルな生活の状況」の「生活」は次の二つを含むと思われる。つまり、健康に関連した体力の例では、自由な余暇時間にとどまらず学校内外の生活全般にわたり健康に関連した選択や行動をとることが想定されている。これに対し、ボール運動の評価では、学校内外の自由な余暇時間の運動生活で行われるスポーツの試合という「生活」場面が想定されている。この「生活」はホップルの場合と共通している。

リンクの場合は、テストに合格しても学んだことを実際の生活の状況で使用できない例として、「心拍数を利用する方法を知っているが、自分の運動レベルを決定するために自分が収集した情報を使用することができない」¹³⁾生徒の場合が示されている。ここではメツラーと同様に、学校内外の生活全般にわたり健康に関連した選択や行動をとる状況を「よりリアルな生活の状況」と捉えていると思われる。

それでは次に真正の評価の具体例を学校内外の生活全般の状況で課題を遂行する健康関連体力の場合と余暇時間の運動生活の場合に分けて検討する。

2. 「オーセンティック・アセスメント（真正の評価）」の具体例

(1) 健康関連体力の「オーセンティック・アセスメント（真正の評価）」の具体例

メツラーは「健康的なライフスタイルを促進する」という目標の場合、その学習の真正の評価は、生徒の健康に関係した選択や健康に関連した行動を行う場所でなされると述べた。NASPE (1995) には、体育で学ぶべき内容基準に「積極的に身体を動かすライフスタイルを示す¹⁴⁾」がある。

NASPE (1995) によると、この内容基準は、意味のある身体活動への定期的な参加を確実にすることを意図している。そのために、教室の体育への参加を契機として教室外で定期的な身体活動への参加の実現が目指される。低年齢では楽しく運動することがめざされ、成長するにつれて学校内外でさまざまな運動を行うことになる。ただし、全体を通して次の認知的な理解の発達がめざされている。つまり最初に活動が身体に直接的効果を生み出すことに気づき、だんだんと身体活動が生理学的な身体、社会的な機会と人間関係、情動の幸せに果たす役割を理解し、さらに健康なライフスタイルという考え方の包括的な見通しを理解するという¹⁵⁾。「積極的に身体を動かすライフスタイルを示す」ためには、教室外の全般的な生活で身体活動が果たしている様々な役割を理解することが求められ

ているのである。

表1は「積極的に身体を動かすライフスタイルを示す」内容基準に関して、6年生（日本の小学6年生）と12年生（日本の高校3年生）の「目指す成果」と「評価方法の例」と「評価基準」を示している。6年生では、「1. 生徒のプロジェクト」で学校と地域社会で定期的に身体運動を行う計画の作成を通して、運動する機会を制約する運動団体の有無や費用、時間等の条件の理解が評価されている。これらの運動する機会を制約する条件の理解は、12年生になると「3. 生徒のプロジェクト」で身体運動の企画に参加し目標や達成と参加の程度を記録する課題に加え、「2. インタビュー」で個人の年齢や性という条件が運動パターンに及ぼす影響の分析という課題で評価される。

また、6年生の「2. 生徒のジャーナル（体育ノート）」では学校外の生存や労働等の生活全般において自分の身体運動を妨げ、あるいは促進する個人的要因の理解が評価されている。12年生の「1. 生徒のジャーナル（体育ノート）」になると、3ヶ月間の長期にわたり自分の個人的な身体運動の記録を残すとともに自己のライフスタイルの改善策を提案することを通じて、運動を妨げたり促進したりする個人的要因の理解が評価される。

さらに、6年生の「3. ポートフォリオ」では、スキル改善のために毎日運動する計画を立て授業の内外で実行するプロジェクトが課せられ、その過程で集めた資料がポートフォリオの中に保管される。この課題の「評価基準」の欄を見れば、様々な条件を考慮に入れて適切な目標を設定し、目標に見合った計画を適切に開発

して実施し、必要な情報を収集することができるかどうか評価される。そして、12年生の「4. 生徒のプロジェクト」では、スキル改善に加えフィットネスの発達を含む定期的な運動の計画を立てて実施し、計画を制約する条件と目標達成レベルの結果、さらに長期参加の見通しを書いたレポートの提出が求められている。これらのプロジェクトでは、たえず変化する授業内外の生活の複雑な条件を考慮に入れて問題を解決する認知的な判断に関してその到達を評価していることを示している。

表1 「ナショナル・スタンダード：6年生と12年生の目指す成果と評価の方法の例」NASPE (1995), pp.93-95.

目指す成果	評価方法の例	評価基準
<6年生> ・学校と地域社会での身体運動に定期的に参加する機会を確実にする。 ・健康的なライフスタイルの確かな批評を行う。	1. 生徒のプロジェクト 生徒は学校と地域社会で身体運動に定期的に参加するための機会を確実にすることを習慣とする計画を開発するよう指導される。運動のタイプ、機会を提供する団体、その団体の住所と電話番号、参加費用、特に必要な用具、申込期日、参加時間という様々な情報がその計画に含まれる。生徒はその情報を収集し様々な活動について簡単に情報を示す計画を編成するよう促される。一人ひとりの計画に関する情報から作成された学級の計画によって情報が集約されること。	a. 地域の運動の機会に合う計画を完成。 b. 身体運動のために提供された情報の量と型の点で計画に正確な情報を提供。 c. アイデアを十分に組織し提案ができる。
	2. 生徒のジャーナル(体育ノート) 生徒は決められた期間に自発的に従事する学校外での身体運動を記録するジャーナル(体育ノート)を持つよう要求される。生活上の役割(例えば、生存、労働、健康増進の身体運動)のために必要な身体運動がそこに含まれるべきである。身体運動の隣に、生徒は身体運動をより健康増進に役立つよう実行する方法(乗り物に乗るより歩く; リモコンを使用せずテレビのチャンネルを変える)を記録すべきである。生徒は定期的に健康増進の身体運動に参加することのできるようにする生活の様々な要因を記述し、もっと健康を増進する運動を含むように毎日のおきまりの仕事を変えることのできるような方法を提案するべきである。	a. ジャーナル(体育ノート)を正確に完成する。 b. 身体運動を妨げたり促したりする要因を明らかにする。 c. 日々のおきまりの仕事を修正することに関して洞察する。

3. ポートフォリオ 生徒は好きな身体運動を選ぶよう求められる。教師の援助を得て、生徒はその運動のスキルの改善のための目標をたて、毎日10分が15分行う計画をたてる。さらに、生徒は計画に従って行う実際の実践の日誌を書きとめる。授業の時間内や時間外でその課題を実行する。改善の証拠が集められ、日誌、確定した目標、選択した運動のための原理と目標、運動への参加を示すその他の証拠を含むポートフォリオの中に保管される。	a. 適切な目標の選択 b. 適切な計画の開発 c. 目標と一致 d. プロジェクトの十分な提供。	
<12年生> ・自分の生活を通して積極的に身体を動かすライフスタイルを自力で維持するためのスキル、知識、興味、願いを持つ。 ・運動への参加パターンが生活を通してどのように変化しようか、そして運動パターンの変化によるような方路があるかを理解すること。	1. 生徒のジャーナル(体育ノート) 生徒は最低2ヶ月間個人的な身体運動に毎週参加して記録を作成する。彼らは前の週にその身体運動への参加を増減する過程や条件を書くべきである。さらに、生徒は2ヶ月の経験の要約を報告する。その報告は以下の2点を含む。(1)彼らの参加を制限するもっともよくある制約(2)健康を増進して個人の活動の目標を達成するのに助ける運動への参加レベルを達成するために、ライフスタイルにおいて実際にできそうな変化を提案すること。 2. インタビュー 生徒は10歳から30歳、40歳から50歳、65歳から75歳の年齢範囲の男女にインタビューするよう要求される。生徒は各個人の運動パターンを調べ、その各自が身体運動の生理学的心理学的社会的な利益を得ているかどうかを調べるためにそれらの運動パターンを評価する。さらに、性別や年齢別の運動の傾向を調べる。最後にどのように彼らが運動の健康への利益を最大限にするために、どのように彼らが自分の運動処方調整する事ができるかに関して提案する。 3. 生徒のプロジェクト 生徒が個人的な興味で、スキルやフィットネスの改善と維持を含んだ連続する身体運動の企画に参加する。生徒は個人の目標、達成度、参加の質の証拠を提供するためのスクラップブックや日誌を準備することを要求される。 4. 生徒のプロジェクト 生徒は自分の興味と欲求と能力を基礎に身体運動を選択する。そして生徒はその身体運動を含む定期的なプログラムを実施する計画を立てる。その身体運動の中で、生徒は運動のスキルやフィットネスの発達を記し、実技、設備、施設、用具、指導、(できれば)費用を記す。計画後のプログラムに参加して数週間後、生徒は彼らがそのプログラムをどう感じるかを示す概要を書く。その概要は目標達成レベルと楽しさと長期の参加の可能性を示す文章を含んでいる。	a. 3ヶ月間ジャーナル(体育ノート)を書く。 b. 実際的にそして十分に、制約を書き。 a. インタビューの実施。 b. 運動パターンの正確な記述。 c. 適切な運動の提案。 d. 性別の運動パターンの正確な分析。 a. 個人目標の証拠提示。 b. 個人の運動目標に合った適切な経験を含む。 a. 生徒の計画でスキルとフィットネスの発達のための目標の具体化。 b. 実技、設備、費用、指導の適切で正確な記述。 c. 個人の見方、目標達成、長期参加の分析が含まれている。

NASPE (1995) が求めている「積極的に身体を動かすライフスタイルを示す」という内容基準は、学校内外の生活全般の中で身体運動が果たす様々な役割を理解することを必要としていた。生産や労働場面を含む生活全般において身体運動の機会を制約する条件や各個人の身体運動を左右する要因の理解を評価し、学校内外の複雑な条件を考慮して身体運動を計画して実施するための認知的な判断を評価する表1の「評価方法の例」は、「積極的に身体を動かすライフスタイルを示す」ために必要な知識や判断を評価しているという意味で妥当性の高い方法といえる。

(2) ボール運動の「オーセンティック・アセスメント (真正の評価)」の具体例

メツラーは「グリフィン、ミッチェル、オスリンによって開発された (GPAD) はゲームのプレイ中の、係わり合い、スキル、戦略、意思決定といったいくつかのカテゴリーにおいてプレイヤーのパフォーマンスを分析することによってこのことを行っている。¹⁶⁾」と述べて、球技の授業のオーセンティック・アセスメントの具体例としてGPAD (Game Performance Assessment Instrument) をあげている。

GPAD は、まず球技に熟練した教師とコーチの協議により図1にあるようなカテゴリーをゲームパフォーマンスの構成要素として抽出した。ただし、このすべてのカテゴリーがすべての球技に適用されるわけではない。図2は、ボールを保持しつづけることとゴールを攻撃することをねらいとするサッカーの単元で用いられたGPADの例であるが、ここでは「意思決定」「技能発揮」「サポート」が適用される。図2の場合、

ゲームパフォーマンス評価法 (GPADI)	
カテゴリー	
1. ベース	ある技能を発揮し、次の技能を発揮するまでの間のホームポジションあるいはリカバリーポジションへの適切な戻り。
2. 調整	ゲームの流れに応じた、オフフェンスあるいはディフェンスのポジション調整の動き。
3. 意思決定	ゲーム中にボール (あるいはシャトルなど、ボールに相当するもの) などを操作して何を行うべきかに関する適切な選択。
4. 技能発揮	選択した技術の有効な実行。
5. サポート	味方チームがボールを保持している場面で、パスを受けるポジションへ移動するボールをもたない動き。
6. カバー	ボールを保持している味方プレイヤーやボールに向かって移動している味方プレイヤーに対するディフェンス面での支援。
7. ガード/マーク	ボールを保持している相手プレイヤー、もしくはボールに向かって移動している相手プレイヤーに対するディフェンス。

図1 ゲームパフォーマンスの構成要素 (グリフィン他著、1999年、p. 200.)

日付96/4/16		GPADサッカー		クラス2C		
①ゲームパフォーマンスの要素						
②適切さと有効さの評価基準						
③スローイン、ゴールキック、コーナーキック等のリスタートを含む						
カテゴリー						
意思決定	基準—プレイヤーがフリーのチームメイトにパスをしようとする。プレイヤーが適切なタイミングでシュートしようとする。					
技能発揮	基準—レシーブ：パスされたボールのレンジコントロール。/パス：ボールがターゲットにとどく。 シュート：頭の高さより低いボールをターゲットにあてる。					
サポート	基準—プレイヤーがパスをもらうために適切なポジションにとどまったり、移動したりして、ボール保持者のサポートをする。					
	意思決定		技能発揮			
名前	適切	不適切	有効	非有効	適切	不適切
マシュー	×××× ××	×	×××× ××	×	×××× ×××	××××
ブライアン					×××	×××
キャディー	×××× ×	×	×××× ×	×	××××	×
ケリー	××	×	×××	×	×××× ×	××
ピーター	×××	××	××	×××	××	×
アリソン	×	××	×	××	×××× ×××	×

図2 サッカーパフォーマンスの観察結果 (グリフィン他著、1999年、p. 201.)

マシュー君が空間へサポートの走りこみをすれば「適切」と記録し、チームメイトがサポートを必要としているときにそれができなければ「不適切」と記録される。また、マシュー君がボールを保持した際に下した意思決定ごとに「適切」もしくは「不適切」と記録される。例えば彼が相手からマーク（あるいはガード）されている味方にパスすれば「不適切」と記録される。また、そのパスがうまくけられていればそれは技能発揮が「有効」と記録された¹⁷⁾。

GPAIは、統制された条件で動きの正確さを測る標準化されたスキルテストと比較すれば、図1の「意思決定」というカテゴリーに端的に示されるように、たえず回りのプレイヤーが動く状況の変化を読んで自分の動きを決定する複雑な認知的判断を測っていることがわかる。つまり、GPAIは目標とされた球技の試合のパフォーマンスを正當に測っているといえよう。ただし、実際に試合を観察してGPAIを用いて正確に記録するためには、正確な判定が出来る能力を持った評価者が必要となる。

(3) 「オーセンティック・アセスメント（真正の評価）」の信頼性を高める工夫

「真正の評価」の具体例を検討した結果、それらは授業で目標とされた成果の有無を測っていることがわかった。つまり、測りたいものを実際に測っているという意味での評価の妥当性は高いと言えよう。しかしながら、GPAIの検討で指摘されたように、それらの場合には評価者に正確な判断ができる能力が求められることがわかった。この点に関して、リンクは「あたらしい評価のほとんどが、ある観察についての

判断をすることについて評価者に大きく依存している¹⁸⁾」と述べ、「真正の評価」ではパフォーマンスを観察する評価者が正確に判断することが課題であると指摘している。誰が行っても同じ評価の結果が得られる再現性という意味での評価の信頼性を確保するために、リンクは、以下のような個人のスキルが必要と指摘している。

①使用する評価の課題やテストがあなたの目標や目標に対して教えたことに関連しているかどうかを確かめる。②評価の課題として適切なパフォーマンスと考えていること、生徒に知ってほしい、できてほしいと考えていることの規準 (the criteria) を明確に規定すること。③さまざまな能力について、パフォーマンスの間の差異にあわせて、パフォーマンスの特定のレベルを確定すること。④さまざまなスキルレベルや年齢や学級で、同じ評価の道具を用いて実際に評価すること。⑤評価の道具を選択したとき、実践した後のニーズを基礎にそれを改訂する。⑥別のときに同じ生徒を段階付けして、自分の信頼性を確かめること。⑦評価の道具で使用した規準を持続すること。他のパフォーマンスについて持っている生徒の情報を資料として使用しないこと。¹⁹⁾

これらのリンクの指摘した留意点は、観察に必要な個人のスキルを習熟させることで評価の信頼性を高めようとする工夫である。

これに対して、教師が生徒のパフォーマンスを観察して行う評価の信頼性を高めるためのシステムの例として、イギリスの中等教育終了時の資格試験であるGCSE (General Certificate of Secondary Education, 一般中等教育修了証書) の場合を取り上げる。GCSEはいくつかあ

る試験機関が提供するシラバスを学校が選択する。北部試験評価機関 (NEAB) が提供している GCSE の体育を取り上げる²⁰⁾。

NEAB の体育の到達目標と学習評価の方法は図3のようになっている。運動の実技と分析的探求の学習評価の方法はコースワーク (coursework) である。キャロルによると、コースワークは、期末試験 (terminal examination) と対照的な方法である。コースワークは、授業中かコースの終りにコースで指導された内容に関連した課題を生徒が教師に示してみせ、これを教師が学習評価する方法である²¹⁾。つまり、コースワークは運動の実技や実技の分析というパフォーマンスを教師が観察し、生徒が望ましい成果に到達しているかどうかを評価するパフォーマンス課題なのである。

到達目標	学習評価の方法	配点
運動しながら計画、遂行、エヴァリュエーティングを相互に関連付ける能力を含んだ運動の能力の程度	運動の実技 (コースワーク)	50%
自分自身や他人のパフォーマンスを分析して改善する能力	分析的探求 (コースワーク)	20%
知識と理解 (1.パフォーマンスに影響を与える要因、2.身体運動の健康と安全に関する側面 3.身体運動へ参加する理由と参加の機会)	期末試験 (ペーパーテスト)	30%

図3 NEAB の到達目標と学習評価の方法及び配点
NEAB (1998), pp.2-3.

実技の学習の仕方は運動場面で発揮されるため、実技の分析を課題とする分析的探求は実技と切り離して実行することは困難である。つまり、ペーパー試験よりもコースワークの方が測りたいものを測れるという意味でより妥当性は高い。ただし、コースワークは、結果の信頼性に疑問が出されているので、次のような手続きをとる。つまり、コースの実施前に学習評価規

準の水準を揃える (standardisation) ための講習会に体育教師が参加し講習を受ける。これはスタンダライゼーションという手続きである。さらにモデレーションという手続きがなされる。それは、NEAB のモデレーターが学校を訪問し、抽出児の実技を観察し学習評価結果の正当さを確かめるのである²²⁾。NEAB のスタンダライゼーションとモデレーションという手続きは、コースワークの結果の信頼性を確保するシステムとして注目できると思われる。

おわりに

これまでの検討により「オーセンティック・アセスメント」という概念の影響による体育の評価の変化について以下の諸点が明らかとなった。

まず、ホップル、メツラー、リンクは、オーセンティック・アセスメントを「よりリアルな生活の状況」に参加することで、またはそれを真似たやり方で評価することと解釈している点で共通していた。しかし、その「生活」の捉え方には相違があった。つまり、メツラーは「真正性」の判断基準となる「よりリアルな生活の状況」の「生活」を、スポーツなどの身体運動を評価する場合には学校内外の自由な余暇時間に行われる運動生活と解釈し、健康関連体力の評価の場合には学校内外の生存や労働を含む生活全般の双方に用いていた。これに対して、ホップルは「生活」を前者の意味に用いてスポーツや舞踊のオーセンティック・アセスメントを紹介し、リンクは「生活」を後者の意味で用いて健康関連体力の評価でオーセンティック・アセスメントを用いるべきと指摘していた。

次に、NASPE のナショナル・スタンダードで

健康関連体力のオーセンティック・アセスメントとして紹介された実例では、学校内外の生活全般において身体運動の機会を制約する条件や各個人の身体運動を左右する要因の理解や、学校内外の複雑な条件を考慮して身体運動を計画して実施するための認知的な判断が評価の対象とされていた。従来の健康関連体力の評価で用いられていた標準化された体力テストや記述式テストと比較すると、体育の評価は、国家課題ともなっている体力の維持向上や健康なライフスタイルの実現に必要な知識や認知的判断を評価の対象とする方向に変化してきたといえよう。

また、球技の授業の実例である GPAI では、たえず回りのプレイヤーが動く状況の変化を読んで自分の動きを判断する複雑な認知的判断を測っていることがわかった。スポーツという身体運動のパフォーマンスを評価する場合、体育の評価が試合で求められる認知的な判断を評価の対象とする方向に変化してきたことを示すと思われる。

たしかに、体育のオーセンティック・アセスメントは、授業で実現を望まれる成果をある程度正確に測っているという意味で評価の妥当性は高いと思われる。しかし、授業で示されるパフォーマンスの観察に基づき評価した結果は、誰が評価してもある程度共通した結果が出るという信頼性の確保が必要である。これに対しては以下のような提案が行われていた。つまり、生徒のパフォーマンスを観察する評価者の能力の向上が課題とされ、観察に必要な個人のスキルを習熟させることで評価の信頼性を高めようとする提案である。このような個人の観察に必要なスキルの向上を保障する研修の実施は不可

欠と思われる。また、GCSE のコースワークの信頼性を高める工夫に学び、体育の実技評価の場合も、学期の最初に近隣の数校の体育教師が講習会を開催して学習評価の水準を揃えるスタンダライゼーションを実施するとともに、学期の最後に各種目の専門家が学校を訪問し、実際の体育の授業の評価の結果の正当さを確かめるモデレーションを実施することが望まれる。

注

- 1) 井谷恵子, 2000, 「アメリカにおける1980年代以降の教科体育の危機—高等学校体育の衰退傾向と打開に向けての議論—」『教育実践学論集』第1号, pp.53-65.
- 2) 友添秀則, 2002, 「アメリカにみる学校体育カリキュラム改革の動向」『スポーツ教育学研究』Vol.22, No.1, pp29-38.
- 3) 西岡加名恵, 2003, 『教科と総合に活かすポートフォリオ評価法：新たな評価基準の創出に向けて』図書文化, p.31.
- 4) 同上書, p.140.
- 5) メツラーとリンクは体育科教育学の国際的学術雑誌である Journal of Teaching in Physical Education (JTPE) の編集委員を務めるアメリカの著名な体育科教育学者である。またリンクは1995年に出版された NASPE の体育基準書の編集委員長を務め、メツラーは2000年に出版された JTPE の体育教師教育の評価問題特集号の編集長を務めるなど、両名ともアメリカの体育の評価論をリードしている研究者である。さらに、ホップルは1992年に発表された NASPE の「優れた体育プログラムの学習の成果」をもとに、本研究で資料として用いた小学校の体育

- 基準書を出版した。これらのことから、彼らの著書はNASPEの体育基準書が求めた評価の新たな方向を検討する資料として有効と判断した。
- 6) Hopple, C.J., 1995, *Teaching for Outcomes in Physical Education*, Human Kinetics, p.19.
- 7) Metzler M. W., 2000, *Instructional Models for Physical Education*, Allyn & Bacon A Person Education Company, p.55.
- 8) Rink, J. E., 2002, *Teaching Physical Education for Learning*, McGraw-Hill Higher Education, p.267.
- 9) Hopple, C.J., 1995, p.20.
- 10) Ibid.
- 11) Metzler M. W., 2000, p.55.
- 12) Ibid.
- 13) Rink, J. E., 2002, pp.266-267.
- 14) NASPE, 1995, *Moving into the future: National Standards for Physical Education*, WCB/McGraw-Hill, p.2.
- 15) Ibid., pp.2-3.
- 16) Metzler M. W., 2000, p.55.
- 17) Griffin, L., et al., 1997, *Teaching Sport Concepts and Skills. A Tactical Games Approach*, Human Kinetics, pp.220-221.
(グリフィン他著, 1999, 『ボール運動の指導プログラム』大修館書店, pp.200-202.)
- 18) Rink, J. E., 2002, p.267.
- 19) Ibid., p.266.
- 20) GCSEは、イギリスの義務教育終了段階での資格試験であり、学校外の試験機関が作成したシラバスに基づき指導と試験が実施され、資格が認定される。
- 21) Carroll B., 1994, *Assessment in Physical Education*, Falmer, p.11.
- 22) NEAB, 1998, *General Certificate of Secondary Education (GCSE) Syllabus for 1998 Physical Education 1271*. NEAB, pp.75-78.